

ケンゾーくん

中村 龍介

二〇一八年もアツという間に半分が過ぎてしまった。短い半年だったが、いくつかわきごとがあつた。最大のニュースは、何と言つても独居老人の我が家に新しい家族ができたことだろう。

昨年十月、可愛がつっていた猫のゴンタが発病から一週間で逝ってしまった。急性の血液がんであつた。それからというものの、ペットロス症候群とやらに罹ってしまったのか、毎日の生活にハリのようないものが無くなってしまった。

生来一人っ子の私は孤独に強い筈だった。学生時代の下宿生活では大いに羽根を伸ばしたし、会社生活で経験した海外駐在も最初の赴任先はトルコのイスタンブールに約二年の単身赴任であつた。家族や友人どころか日本人が居ない生活だったけれども、特に寂しさを感じたことはなかつた。

結婚して四人の娘に恵まれたが、妻に先立たれ、娘たちもそれぞれ独立、二年前には、広いマンションで私とゴンタだけの生活が始まつた。そして、そのゴンタが居なくなつて初めて、『孤独』を意識するようになった。

近くに住む次女が心配したのか、猫に代わるペットを飼うことを提案してきた。手間のかからないものと、金魚、亀、ウサギ、カナリア等々様々なペットが候補に上がった。小鳥に絞るなら、私は何故か手乗り文鳥に興味があつた。

犬や猫なら近くのペット店に売っているし、金魚や亀なら夜店に行つても買える。が、小鳥となると何処に行けばいいのだろう。ネットで調べてみた。決して近くはないが、世田谷区用の賀まで行けば小鳥店がある。

四月のある土曜日、次女と一緒に車で出かけた。環八を真っ直ぐ北上し、用賀で一本横の商店街に入る。『猶井小鳥店』は商店街の中ほどにあつた。店構えはさほど大きくはないが、中は小鳥と熱帯魚が完全に分離されていて、小鳥の売り場にはたくさんヒナドリがチィチィ鳴いていた。

白の手乗り文鳥を見せてもらった。羽毛も未だ十分生え揃わないヒナ鳥がやたらと大きな口をパクパクと開けて餌をおねだりしている。店の女主人のMさんが挿し餌のやり方を説明してくれた。

大きく開いたクチバシの中に挿し餌のスポイドを差し込んで押すと、中のすり餌が口の中に入る。一気に飲み込んだかと思うと再び口を大きく開けてチィチィと鳴く。

「可愛い！」

次女が大きく叫ぶ。その瞬間にヒナ鳥の運命も決まったようだ。

「お父さん、これにしよう！」



それから三ヶ月。ケンゾーと名付けた真っ白な文鳥は、リビングの出窓に置かれた鳥籠の中で、我が家の新しい家族として、種々の権利を主張する。

「新しい餌がほしいよ。水浴びの水が少ないよ。籠の蓋を開けてくれ！」

我が家に来た時は二十二グラムだった体重は現在二十四グラム。成鳥でも二十五グラムというから、八十二円切手一枚で配達してくれる重量だ。

『手乗り文鳥』というだけあって、人間の手のひらが大好きだ。人間の手に乗っていると満足の御様子。指先を噛んでみたり、指と指の間にクチバシを突っ込んでみたり、手のひらを丸くしてやると目を閉じて寝てしまうのではないかと思わせるときもある。

はじめての場所に連れて行くと矢張り興奮するようだ。驚くとクチバシを開いたまま考え込むような素振りをする。『開いた口が塞がらない』のは人間だけではなく、鳥の世界でも共通なのかと思ったりする。

今年になってから少し足が遠のいていた次女も、鳥籠の掃除という名目で週末には必ずやってくるようになった。夫婦間では『子は鎧(カスガイ)』というが、ペットは親子間の鎧かもしれない。

ケンゾーの出現は我が家に新しい風を吹き込んだのは間違いない。そこで、私はケンゾー君にひとつお願いしたいことがある。

文鳥の寿命は七〜八年といわれる。今年七十八歳になる私とはいい勝負になりそうだ。だが、ケンゾー君、お願いだ。必ず私より長生きしてほしい。

【二〇一八年七月記 原稿用紙約五枚 課題「ニュース」】